

# ショパンのピアノ協奏曲「室内楽版」

— 1990年代からの録音史概観 —

小 岩 信 治

本誌が読者のお手許に届く2015年は5年ごとに開催されるショパン国際ピアノコンクールの年（第17回）であり、10月18～20日にはファイナリスト数人が、ワルシャワ・フィルハーモニーホールの舞台に立つ。フレデリク・ショパン（Fryderyk/Frédéric Chopin, 1810-49）の作品の演奏者として世界の頂点に立とうとするピアニストたちはそこで、彼のピアノ協奏曲2曲のうちの1曲を、国立ワルシャワ・フィルハーモニー交響楽団と演奏する。20日の夕刻にはあたらしい「ワルシャワの覇者」が決まり、21～23日の受賞者コンサートをもって、ショパン生誕205年のコンクールは幕を閉じることになる。

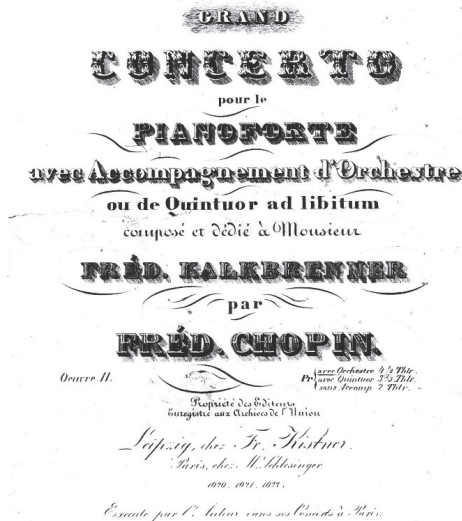
こうしてショパン・コンクールのクライマックスで演奏され、またコンクールの外でも世界各地のコンサート・ホールでしばしば演奏されている彼のピアノ協奏曲が、ピアノと弦楽器奏者数名による室内楽編成で演奏できることは、1990年代から次第に広く知られるようになった。本稿は、「室内楽版」（五重奏伴奏、四重奏伴奏の違いに関わらず本稿では便宜的にこう呼ぶ）が、メモリアル・イヤー2010年を挟む1990年代末から2010年代初めの時期にどのように演奏されてきたかを、録音の情報を中心に整理するものである。

## 1 ショパンの協奏曲「室内楽版」とは

### (1) 五重奏伴奏（＝ピアノ六重奏）版

管弦楽曲であるはずの協奏曲が、ショパンの場合「室内楽版」で演奏できる事情については拙稿（2002および2012）にまとめてあるので、ここでは要点のみを整理する。

ショパンのピアノ協奏曲2曲はいずれも、1830年代に楽譜（パート譜）が出版されたときに、管・打楽器パート以外、つまり弦楽器とピアノのパート譜だけの「部分販売」が行われ、ピアノと弦楽五重奏、計6人で演奏できるようになっていた。これが本稿で言う「室内楽版」の1つである。ただし注意すべきは、そのために今日という編曲やアレンジが行われたのではなく、また「室内楽版」という別の楽譜が制作されたわけでもない、ということだ。《ホ短調》のドイツ初版（1833）ではフル編成のときに管楽器だけが演奏することになっているフレーズが、ほぼ機械的に、同じ音高の弦楽器のパート譜に小さな音符で転載されていた。弦楽器パート、例えば第1ヴァイオリンのパート譜に、オーケストラで演奏するときのヴァイオリン本来の音符に加えて、管・打楽器が不在のときに演奏すべき、もともとフルー



ショパン《ピアノ協奏曲ホ短調》ドイツ初版（1833）表紙。

「オーケストラ伴奏または五重奏伴奏」のピアノ協奏曲とあり、全パート譜の価格、そして「ピアノと弦5部のパート譜」の価格が作曲家名の右下に見える。

トなどに割り振られていた重要旋律が小さな音符で印刷されているのである。《ヘ短調（第2番）》の場合、管楽器パートの弦楽器パートへのこうした転載はみられないが（例えばドイツ初版，1836）、にもかかわらず「ピアノと弦楽5部」の楽譜として販売された。つまり管楽器パートはなしでも演奏できると見込まれていたのである。

ピアノ協奏曲をそのように、管楽器にあまり多くの役割を与えない音楽として作曲し、数人で演奏できるよう出版することは、この時代に特別ではなかった。だから、1832年にパリのサル・プレイエルでショパンがこの大音楽都市でのデビューを果たしたとき、彼が《協奏曲ホ短調》をおそらく弦楽五重奏と演奏した（Eigeldinger 2000

（2007）邦訳206以下）ことは驚くに当たらない<sup>(1)</sup>。

こうして当時のピアノ協奏曲の楽譜，たとえば上記の《ホ短調》ドイツ初版は基本的に管楽器なしで演奏できることになっているが，弦楽5部だけでは本来のオーケストラ声部を代替しきれない箇所が，今日ピアニストが演奏しない「トゥッティ」の部分にある。同時代の資料から推測されるのはまず，このような箇所では，「室内楽版」の場合にいない楽器の分，ピアニストが自分のパート譜に印刷されていた，管楽器の名前が付された小さな音符を演奏した，ということである。さらに，このような箇所に限らずトゥッティ部分全体でピアニストが自分の楽譜のオーケストラ略譜を弾き続けたことも想像される（この点に関する具体的な説明についてはGoldberg 2002：67以下も参照）。今日独奏者が沈黙するトゥッティ部分で，当時はピアニストが参加していたことになる<sup>(2)</sup>。

## (2) 四重奏伴奏（＝ピアノ五重奏）版

こうして，ショパンの協奏曲の場合は2曲とも，初版譜に基づく「室内楽版」ではコントラバスの参加が想定されていたのだが，近年の「室内楽版」演奏にはピアノと弦楽四重奏の組み合わせも多い。2003～04年にPWMからコミネク Bartłomiej Kominek による編曲版が出版されたことも，この編成での演奏を容易にしている。

ショパンの協奏曲を弦4部と合奏することについては歴史的に根拠がある。彼はワルシャワで《ホ短調》の練習について，1830年に次のように書き記しているからである。

旅立ちも近いので、今週《協奏曲》[ホ短調]の全体を四重奏で練習することになっている。まずはこの四重奏と僕との間で意思疎通が成立する必要がある、少し馴らす必要がある、それをせずいきなりオーケストラとリハーサルをしてもうまく整わないというのがエルスネルの言葉だ。(8月31日付け書簡, Chopin 2009 (2012): 383f.)

この言葉はコピランスカ Krystyna Kobylańska によるショパン作品主題目録(1979)でも紹介されたため、作曲者自身が小編成で協奏曲を演奏した記録として80年代から知られていた。ただし当時の演奏譜などは残されていない(そもそも《ホ短調》は自筆総譜が現存しない。)また、それは四重奏伴奏版であって、33年出版譜の五重奏伴奏とは異なる<sup>(3)</sup>。今日使われている「四重奏伴奏版」は、あくまで21世紀にまとめられた編曲作品である。

以上をまとめると、今日ショパンの協奏曲を「室内楽版」で演奏する方法は次のように大別できる。

- 1) 五重奏伴奏か四重奏伴奏か 前者の歴史的根拠を求めるなら1830年代の初版譜を使用。後者は歴史的資料が存在せず、現実的にはコミネクの編曲版を指すことになる。
- 2) 五重奏伴奏版を採用する場合、トゥッティ部分の不足箇所をピアノで補うか否か。なお四重奏伴奏版の場合は、コミネク版を使うとトゥッティ部分を弦四部で担当するようになっているため、実際的には論点ではなくなる。

換言すれば「室内楽版」のさまざまな演奏は、上記の方法の違いによって大別できる<sup>(4)</sup>。

## 2 「復活演奏」の録音史：21世紀初頭10年余りの概観

「室内楽版」の楽譜の存在は19世紀から明らかであったし、事情を知る人々はその後20世紀に入ってから数人でショパンのピアノ協奏曲を演奏していたのだろう。けれどもその存在が国際的に話題になり始めたのは、1990年代の3つの録音が契機となった。まず95年に白神典子 Fumiko Shiraga (ピアノ)らが「世界初録音」をリリース(《ホ短調》《ヘ短調》)、続いて98年にはルイサダ Jean-Marc Luisada (ピアノ)ほかによる録音が出た(《ホ短調》のみ)。また、白神、ルイサダ以前に「室内楽版」に取り組んでいたドレヴノフスキ Marek Drewnowskiの演奏も1999年に発売された。以下、その後に発売された録音のうち比較的入手しやすいものを例に、近年の傾向を読み取ってみよう。

2005年のフィアルコフスカ Janina Fialkowskaの録音のうち《ホ短調》の演奏には、ドイツ初版を検討したことが聞き取られる。トゥッティでピアノが参加しており、現代ピアノを使いつつも当時のありように近づこうとした演奏と言えらるだろう。

同年、本邦では近藤嘉宏の《ホ短調》弦楽五重奏伴奏版がリリースされた。近藤はのちの2010年に同じ《ホ短調》を弦楽四重奏と演奏してCDを発売しており、《ホ短調》を2種類

## ショパン ピアノ協奏曲「室内楽版」の録音（2014年までに筆者が確認できたもの）

発売年	ピアノ奏者		弦楽声部数	トゥッティへのピアノ参加	備考
95	白神典子 Shiraga	《ホ短調》《ヘ短調》	5	有	
96	ポリシェフスキ Poliszewski	《ヘ短調》	5	—(注1)	
98	ルイサダ Luisada	《ホ短調》	5	無	
99	ドレヴノフスキ Drewnowski	《ホ短調》《ヘ短調》	5	無	
99	ラジウォノヴィチ Radziwonowicz	《ホ短調》《ヘ短調》	5	無	
99	パレチニ Paleczny	《ホ短調》	5	無	
00	ドレヴノフスキ Drewnowski	《ホ短調》《ヘ短調》	5	無	弦楽オーケストラ
01	スクルシベク Skrzypek	《ヘ短調》	4	—(注1)	
04	スタンボロフ Stambolov	《ホ短調》《ヘ短調》	4	無	
05	フィアルコフスカ Fialkowska	《ホ短調》《ヘ短調》	5	有	
05/10	近藤嘉宏 Kondo	《ホ短調》	5/4	無	
07	シャイヨ Chaillot	《ホ短調》《ヘ短調》	5	無	
07	ヘミング Hemming	《ホ短調》	4	無	
07/11	小倉貴久子 Ogura	《ホ短調》/《ヘ短調》	5	有	歴史的ピアノ使用
08	本間たまみ Honma	《ホ短調》《ヘ短調》	4	無	
08	シュタルクマン Starkman	《ホ短調》《ヘ短調》	5	無	
09	ウッドワード Woodward	《ヘ短調》	4	無	
10	井口真由子 Iguchi	《ヘ短調》	5	無	
10	カツァリス Katsaris	《ヘ短調》	5	無	
11	ルイージ Luisi	《ホ短調》《ヘ短調》	5	無	
11	トリフォノフ Trifonov	《ホ短調》	5	無	弦楽オーケストラ
12	アウアー Auer	《ホ短調》《ヘ短調》	5	無	

(注1) ポリシェフスキとスクルシベクの演奏は確認できていない。

の編成の「室内楽版」で収録した、確認できる範囲で唯一のピアニストである。

07年には小倉貴久子が浜松市楽器博物館の歴史的ピアノ（プレイエル、1830年）を使った《ホ短調》がリリースされる。10年の《ホ短調》と合わせて、ショパン時代のピアノを使った演奏は現在に至るまで世界的に貴重である。

08年の本間たまみの演奏（2曲）は、コミネク版の使用を明示した弦楽四重奏伴奏版。これに対して10年発売の井口真由子の《ヘ短調》は、コミネク版の弦楽四重奏にコントラバスを付加し、結果的に「弦楽五重奏伴奏版」となっている。

10年のカツァリス Cyprien Katsaris のCDは、五重奏伴奏付き（ライヴリ David Lively の編曲）のほか独奏、2台ピアノ、オーケストラ版と都合四種の《ヘ短調》を聞き比べられる珍しい2枚組である。

この約10年の傾向としては、まずコントラバスが参加する五重奏伴奏版が数多く収録されていることが挙げられよう。現代のピアノと合奏するときには四重奏はややパワー不足と感じられるからかもしれないが、とくに《ホ短調》の場合、最低音をコントラバスに委ね、チェロにファゴットの重要旋律を担わせるのが効果的だという事情もあるかもしれない。もう一つの論点、トゥッティへのピアノの参加については、白神によって先鞭がつけられたが、確認できる範囲ではフィアルコフスカと小倉の録音にしか聴くことができない。

ともあれ録音がリリースされ、簡単に確認できるものだけでも、この10年余りの間にこれだけの点数がある。このほか、ここに挙がっている以外に「室内楽版」をコンサートでとりあげた（ただし録音はしなかった）ピアニストは数えきれず、すべてを追跡することが不可能なほどである。

### 3 結び

ちょうど半世紀前の1965年にアメリカ人初のショパン・コンクール入賞者となったアウアー Edward Auer は、2012年にリリースされた録音に関して次のように述べている。

ショパンの時代にはトゥッティの部分でピアニストがオーケストラに参加することが慣習だったのだが、私の耳はどういうわけかそれに従えないのだ。私には、ピアノ・パートはソロ・セクションまで待たせておくのが理想的であって、18世紀の「コンティヌオ的」な慣習は、不完全なオーケストラの足りない声部を補うという実的なニーズを反映していたのだと思われる。(Auer 2012)

ここには、ショパンの協奏曲「室内楽版」を今日、その歴史性を意識しながら演奏 (Historically informed Performance = HIP) するときに演奏者が直面する問題の1つが端的に示されている。演奏者たちはさらに、現代のピアノがショパン時代のもとは違って弦楽アンサンブルを圧倒するパワーを備えていることや、これらの曲をフル編成で演奏するときのオーケストラのダイナミックなサウンドの魅力に聴衆が慣れ親しんでいることも考慮しなければならぬ。HIP や古楽について概説するローズ Stephen Rose の言葉を借りて広く捉えれば、この状況は次のようにまとめることができる。

もしタイムマシンに載って18世紀の演奏を聴きに行けるとして [引用者注：本稿の場合は「ショパン時代の、19世紀の演奏」を聴けるとして]、私たちの趣味に合わないことがらもいろいろ発見することになるだろう。今日の奏者は、今日の趣味を尊重することに違いない (それに影響を与えようとすることもできるが)。奏者自身で納得できない過去を模倣しても、自らに対してオーセンティックだ、正直だとは言えないのだ。(Rose 2009: 123)

ショパンの協奏曲「室内楽版」の演奏は、今世紀に入って、また2010年前後において、明らかに増加した。指揮者がいない音空間での個々のプレイヤー相互のやりとりの面白さ、オーケストラ版では聞こえにくい管楽器の美しい旋律が聴き手に伝わってくる点で、「室内楽版」はショパンの協奏曲の古く新しい側面を明らかにし、少人数で演奏できることでこの曲の演奏可能性を広げた。そして、多くのピアニストたちがこれにトライし、一定の認知を得た現在、90年代に「再発見」されたときの新鮮みが薄れているとすら言えるだろう。他

方で、ショパン時代のリアリティを伝え、その魅力を今日の聴衆が感じ取るためには、上記のとおり今日の「常識」をいくらか否定しなければならない。

この20年余りのさまざまな挑戦はそのような状況を反映している。現時点でこの演奏方法の可能性は——歴史志向の強さの順に——概ね3つのグループに整理されよう。

- 1 ショパン時代のありように近づこうとすれば、トゥッティにピアノを参加させるとともに（白神、フィアルコフスカ）、今日の大きな違いが生まれるファクターであるピアノが問題となる。この点の「復元」を目指したのが小倉の録音である（ただし演奏慣習や楽器を「復元」したからといって価値ある演奏になるわけではないことは言うまでもない）。しかし当時の楽器を調達できる環境にあるピアニストは稀である。
- 2 従って現実的には、現代のピアノで室内楽アンサンブルのよさをとりいれることを目指すことになり、多くの録音は五重奏伴奏でコントラバスとチェロの強みを活かしつつ、今日の慣習に合わせてトゥッティを弦楽のみで演奏している。
- 3 ただし実際には、1のタイプの録音を含めておそらくすべての録音において、演奏者たちは初版譜など一次資料に硬直的に従ってはおらず、微細な改訂をさまざま施している。この点カツァリスの例は現代の編曲であることを謳うもので他と一線を画し、初版譜に立脚して「ショパン時代の資料に忠実」であることを示す束縛から開放され、さまざまなアイディアが自由に取り込まれている。

ショパンの協奏曲は古今東西の多くのピアニストの「夢」である。だから、アンサンブル音楽としてのその演奏を可能にし、フル編成版にはない利点ももつ「室内楽版」には、今後とも一定のニーズが見込まれる。ただし上記のとおり「室内楽版」といっても演奏方法は一樣ではない。ピアニストたちはこれからも今後も、過去との距離感の違いを意識的・無意識的に表現しながら、ショパン作品の演奏史を豊かにしていくのであろう。

## 注

1. ちなみにこの時代はまだ、ピアノ協奏曲をスコアで出版する慣習は定着していなかった。
2. なお現在では、ホフマン Richard Hofmann がトゥッティ部分を弦楽器で演奏できるようドイツ初版に手を加えたもの（1877年頃刊）が国際楽譜ライブラリープロジェクト IMSLP のサイトで公開されている。《へ短調》の場合「ヴァルダーゼー Paul Waldersee による弦楽五重奏伴奏版」が出ている（出版番号 13828 からすると 75 年頃出版）。それは基本的に 36 年の初版を踏襲しており、トゥッティ部分のピアノ参加が不可避である（例えば第 1 楽章第 36 小節以下）。この曲を五重奏伴奏で、トゥッティ部分を弦楽だけで演奏しようとする、現在のところ依拠する出版譜は存在しないので演奏者による補筆が必要である。
3. この点に関して、ショパンがパリに拠点を移して協奏曲 2 曲が出版されるまでの事情

は、次の2つが考えられる。1)彼はワルシャワでは《ホ短調》の弦楽器を4声部で用意して（当時のピアノ協奏曲のありようからするとそれが普通）、出版までに低音部をチェロとコントラバスに分けるアイディアに至った。2)ショパンは《ホ短調》を最初から弦5部とし、つまりチェロとコントラバス声部を分けていたが、ワルシャワでタイトな日程のなかで合奏練習を組む際にコントラバス奏者を調達できず、やむなく弦楽四重奏のみと練習した。

4. なお、今日の演奏の際に五重奏／四重奏部分には弦楽器が使われるが、ショパン時代の感覚ではそこに管楽器が含まれても問題なかったはずである。初版譜に関する同時代の資料には「弦楽」が指定されている記述は見当たらない。

#### 参考資料

- Auer, Edward. 2012. "Notes." *Fryderyk Chopin: The Two Piano Concertos*. <http://www.edwardauer.com>にて発売.
- Chopin, Fryderyk. 2009 (2012). *Korespondencja Fryderyka Chopina*. 第1巻. Warszawa: Wydawnictwa Uniwersytetu Warszawskiego. 邦訳：ショパン『全書簡 1816-1831年ポーランド時代』関口時正ほか訳（東京：岩波書店）
- Eigeldinger, Jean-Jacques. 2000 (2007). *L'univers musical de Chopin*. Paris: Fayard. 邦訳：ジャン＝ジャック・エーゲルディンゲル『ショパンの響き』小坂裕子／西久美子訳（東京：音楽之友社）.
- Goldberg, Halina. 2002. "Chamber Arrangements of Chopin's Concert Works." *The Journal of Musicology* 第19巻1号：39-84.
- 小岩信治. 2002. 「転換期のピアノ協奏曲——ショパンの《ピアノ協奏曲第一番》ホ短調作品11とその〈室内楽版〉について」『転換期の音楽』編集委員会編『転換期の音楽——新世紀の音楽学フォーラム——角倉一朗先生古稀記念論文集——』所収, 216-226. 東京：音楽之友社.
- 小岩信治. 2012. 『ピアノ協奏曲の誕生——19世紀ヴィルトゥオーソ音楽史』東京：春秋社.
- Rose, Stephen. 2009. "Early Music." J. P. E. Harper-Scott ほか編 *An Introduction to Music Studies* 所収, 119-135. Cambridge: Cambridge University Press.